

地上

GOOD EARTH

9

September 2010
Vol.64 No.9

特集 先達に学ぶ
**付加価値をつけた
農畜産物販売 ①**

海外レポート フランスの更生農園にみる
もう一つの農の価値



緊急レポート② 口蹄疫封じ込めに

**奮闘する農家、
地域そしてJA**

決断の瞬間

鈴木 満 鹿島アントラーズ強化部長

地域を巻き込む 「参加型」商品

氷見はとむぎ茶 (富山県JA氷見市)

成見智子=文・写真
text & photo by Tomoko Narumi

富山県氷見市は良質なコシヒカリの産地として知られてきたが、高齢化による担い手不足で休耕地が増え、転作の必要に迫られていた。JA氷見市は、同じイネ科のハトムギを転作作物として選び、2004年から5haでの作付けを開始。06年にペットボトルの「氷見はとむぎ茶」を発売した。寄付金制度をとり入れた販促活動が奏功し、初年度の販売本数は13万本。その後も順調に伸び、昨年は200万本を販売、売り上げは約2億円に達した。今年6月には新製品「透白美人」を発売、全国展開に意欲を燃やす。



マイナー作物に懸ける思い

「日本人の飲み物の嗜好が変わってきただと思っていた。缶コーヒーからペットボトルのスポーツドリンクになって、最近健康志向なのか、サプリメントが入ったものとか、お茶が売れてるよね。ハトムギを本格的に始めたときも、それが頭にあった。さらっとして飲みやすい、水みtainなものにしたらどうかね。こんなに売れるとは思わなかったけど」

JA氷見市代表理事組合長の川上修さんは、転作に取り組んだころを振り返る。粘土質の土壌は排水が悪く、それまで大豆や麦などを試したが育たなかった。そんなとき彼の目にとまったのが、氷見市南部の細越地区で一九八五年から転作栽培されていたハトムギだった。湿害に強く、大豆栽培や稲作で使う農機具をそのまま転用できるため負担も軽い。マイナー作物であるにもかかわらず決断に至ったのは、こうした地域の事情と、飲料としての可能性に懸ける思いだった。

「オール氷見」の取り組み

二〇〇四年、氷見市水田農業推進協議会は地域振興重点作物にハトムギを指定。同JAは農業支援センターを設立し、耕作されていない農地を受託して作付けを始めた。だが、マイナー作物のハトム

ギ用に登録された除草剤は少なく、夏場は雑草に悩まされた。施肥の方法も確立されておらず、草丈が伸びすぎて倒伏するなど困難が続いた。試行錯誤のすえ、初収穫できたのは〇五年の秋だった。

JA氷見市がめざしたのは、生産・加工・販売・消費のすべてを地域でまかなう「オール氷見」の取り組みである。商品化に当たっては、県内の飲料メーカーと交渉を重ね、通常の最少ロットの半々、三万五〇〇〇本の製造で合意した。産地化のためには生産者の輪を広げる必要がある。ハトムギ原穀の相場は1kg当たり三〇〇円前後だが、同JAはその倍以上の七〇〇円を提示し、確実な利益が得られることを農家に説いて回った。

寄付金制度に地域が共感

どうすれば地域を巻き込めるか。〇六年、地域の名を冠した「氷見はとむぎ茶」が誕生したとき、川上さんはそれをひたすら考えていた。そして、毎年三月に氷見市で開催される「春の全国中学生ハンドボール大会」での販売を思いついた。

「市民が買って飲めば、市にお金が入る。地産地消・参加型にしたかったんだ」

一本一〇〇円の売り上げのなかから五円を市に寄付する条件で、ハンドボール協会の了解を得た。この寄付金制度が共感を呼び、旅館や民宿、飲食店などにその



左/氷見はとむぎ茶製品を手に話すJA氷見市の田上政輝総合企画部部长(左)と、川上修代表理事組合長。右/新たに商品開発した「透白美人」

輪は広がった。五月までに三万本が売れ、五万本を追加製造したが、夏までに完売。受託農地で生産した原料は底をついた。だが、前年までに生産要請に応じた農家のハトムギが秋に収穫され、さらに五万本を追加販売することができた。一三万本を売り、手ごたえを感じた同JAは「氷見はとむぎ茶」を地域商標に申請した。富山県では第一号の申請となつて話題を呼び、コンビニエンスストアやスーパーなどにも販路が広がっていった。

研究者との出会い

「ハトムギは昔から、皮膚病や肌荒れに効くといわれていたから、それを証明したくてね。どこかに研究者がいるはずだと、いつもまわりの人に言っていた」

もう一つ川上さんが考えていたのは、ハトムギの付加価値を高める方法だった。〇七年秋、富山県の職員が、金沢大学大学院の鈴木信孝教授が発表したハトムギの薬効に関する研究論文をインターネット上で発見。連絡を受け、川上さんはすぐに教授に会いに行った。昼食をとるのも忘れるほど話が弾んだという。

その年のうちに、鈴木教授を理事長とする「ハトムギ臨床応用研究会」が発足。JA氷見市は、最新の研究結果の発表が行われる研究会に生産者の立場で参加

し、情報発信と商品開発に努めている。研究結果を受け、〇九年にはハトムギの栄養や有効成分の劣化を最低限に抑える高性能の焙煎機を開発、導入した。

熱意が結ぶ「産学官連携」

栽培面積は当初の二〇倍近くに増え、氷見市のハトムギ生産量(一三三三t)は全国の約一〇%を占めるまでになった。ペットボトルは昨年二〇〇万本売れ、市への寄付金は一〇〇〇万円に達した。ペットボトルだけで二億円、ティーバッグの焙煎茶と合わせると二億五〇〇〇万円の売り上げとなるが、粗利益の大半はPRと新製品の研究開発に投じた。その結晶が、六月下旬に新発売された「透白美人」だ。金沢大学などと連携し、ハトムギの美容・健康成分を抽出して独自に開発したエキスが配合されている。産学官連携はいま、地域振興のキーワードの一つだが、川上さんはそれを特別意識して行動したわけではないようだ。

「教授は研究の推進、こちらは成分や効能についての裏付けが必要だった。目に見えない糸でつながった縁だね」

だが、総合企画部部长としてともに商品化に尽力してきた田上政輝さんは、川上さんの隣で首を横に振った。

「本人は偶然とか縁とか言いますが、

それだけじゃない。「農業や地域をなんとかしたいという組合長の思いに共感した」と教授は言っていましたよ。つねにアンテナを張っていたから出会えたのでしょう」

メジャー作物をめざして

はとむぎ茶は近隣地域でも作られるようになった。南隣のJAいなばでは「越中はとむぎ茶」、石川県のJAはくいでは「はくいはとむぎ茶」。いずれも栽培から販売、寄付金制度まで、川上さんたちが培ってきたノウハウをすべて伝授した。

「みんなやっていたほうがいい。メジャー作物になれば、農薬も農機具も開発が進むし、農業共済が受けられるようになれば農家の所得も保証されるからね」

地域のために、農家のために。オール氷見の精神が、静かに広がっていく。



収穫期のハトムギ (JA氷見市提供。24ページも)